

英語における認識的モダリティと態度的感情表現に関する覚え書き

岩澤 勝彦 (大東文化大学経済学部)

A Note on Epistemic Modality and Attitudinal Emotional Expressions in English: Adjectives Representing Speaker's Evaluation, Judgment and Emotion (A Proposal for a New Conceptual Map for Epistemic Domain)

Katsuhiko IWASAWA

はじめに

モダリティという術語を日本で初めて使い始めた中右は、次のように述べている。

- (1) ...although modality has been well-studied, it is only intuitively understood and thus ill-defined. (Nakau 1992 : 42)

また、Narrog (2005b) はモダリティについて、次のように述べている。

- (2) Perhaps no other grammatical category in linguistics has been defined and interpreted as divergently as modality. (Narrog 2005b : 1)

どちらも、モダリティの概念規定が直観に頼って諸説紛々であり、未だに定説がないという趣旨である。これらの指摘には現在でも同意せざるを得ない。モダリティの概念が十分明確に定義されていない状況は、長く続いてきたと行うことができよう。

モダリティに正しい一つの定義を与えることは困難を極めるが、どれほど捉えどころのない範疇であっても、研究対象とする限り、作業仮説として何らかの概念規定が必要である。本稿では、文がモダリティ成分と命題成分からなるとする立場を採用する。文は主観的要素と非主観的要素の二つの部分からなると考える。この考え方は、文が二つの部分からなるという主張を含むため、「二分岐説 (bifurcation thesis)」と呼ばれることがある。

さて、本稿で扱うモダリティは「文モダリティ」である。二分岐説を採るからと言って、文が統語的に二つの部分に分けられると主張しているわけではない。Halliday (1970) が述べているように、モダリティを文中の特定の位置に求めることは必ずしも可能ではない。モダリティは、音調やその他の統語的手段によってマークされることもある。

本稿の目的は三つある。一つは、モダリティを正面から分析対象としている中右 (1994) の階層意味論を概観し、その問題点を指摘し修正を試みることである。中右によるモダリティの定義を導入し、それを支持する言語事実をみる。ここでは、中右の分析が、そのままでは関連する事例をすべて包括するには不十分であることが明らかとなるであろう。中右の定義を吟味し、その修正を通じて認識的モダリティ (epistemic modality) と感情表現についてよりよい理解が得られることを示したい。二つめは、修正した定義が (i) D モダリティ、(ii) S モダリティ、(iii) 感情的態度表現、(iv) 感情の報告・叙述という関連する 4 通りの表現の区別に繋がることを示すことである。その際、特に (iii) に分類される表現の中に、モダリティにきわめて近いものが含まれている点を強調したい。三つめの目的は、Van der Auwera and Plungian (1998) や Van linden and Verstraete (2011) が提出しているような意味地図を感情表現について提案し、(iii) の表現をその中に位置づけることである。

感情表現の研究は最近になって増えてはきたが、その文法的解明はあまりない。しかも大半は、心理述語の他動性との関連でついでに取り上げられる程度である。本稿では、感情表現がモダリティという文法の中核的現象に関わっていることを示し、この領域の研究によってモダリティ概念の明確化を進める余地があることを示唆したい。

本論に入る前に、モダリティの伝統的な定義を Halliday (1970) によって見ておこう。ハリデイは次のように述べている。

- (3) These forms represent the speaker's assessment of the probability of what he is saying, or the extent to which he regards it as self-evident. They are thus restricted to finite, declarative, independent clauses, and finite dependent clauses such as conditionals; there is also a minor system in interrogative, whereby the speaker invites the hearer to express HIS assessment. ...These meanings are what we understand by 'modalities'.
(Halliday 1970 : 328)

この引用に見られるように、ハリデイは、発言内容が実現する確率と自明性に関する話し手の評価 (assessment) のことを modality と呼んでいる。この定義は modality を認識的モダリティに限定している点に注意されたい。本稿でも、モダリティをこの意味で用いる。

分析の対象となる代表的な例は、(4) のイタリック体の表現である。

- (4) a. *I'm not quite sure that it is quite the right colour.* (Palacios Martínez 2009)
 b. *I regret that you are fired.* (中右 1994)
 c. *I do not in the least think that John is a liar, is he?* (Nakau 1992)
 d. *I am afraid that it will happen.* (Bolinger 1953)

- e. *It is astonishing that she should say that to you.* (澤田 2006)
 f. *It is probable that they have run out of fuel.* (Nuyts 2001)
 g. *It is surprising that markets did not react sooner to this.* (Mindt 2008)
 h. *I'm surprised that you have never remarried.* (Mindt 2008)

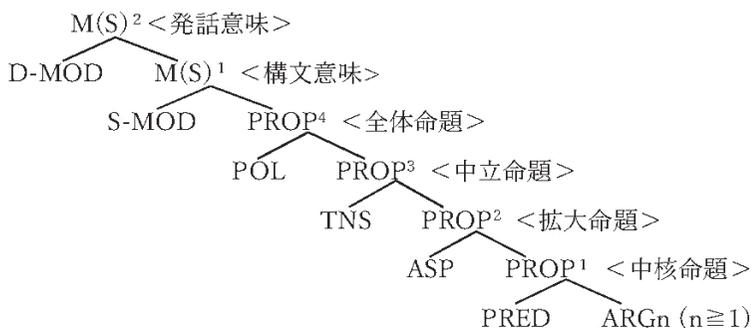
話し手の評価がすなわちモダリティであるならば、(4) のイタリック体部分はどれもモダリティ表現らしく見える。はたしてどの文がモダリティを含み、どの文が含まないと言えるのであろうか。モダリティを同定する基準は何であるのか。その基準について考察することが中心的な問題に含まれるであろう。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、第1節では中右の認知意味論モデルとモダリティの定義を導入する。中右の提案に沿ったモダリティの定義を仮定し、話者のコメント (speaker's comment) の全体的枠組みの中で、感情的モダリティの位置づけの問題に触れる。第2節では、中右理論の不備をいくつか指摘し、それに事実性条件の観点から修正を加える。第3節では、一連の話者のコメント節を分類するための意味地図を提案したい。その際、態度的感情表現に焦点を当てることにする。モダリティの定義からは外れるように見える感情述語の中に、認知的モダリティの候補と考えられる事例があることを指摘する。第4節では、感情的モダリティの候補となる表現とその位置づけを考える。第5節は結語である。Van linden and Verstraete (2011) が提唱している義務的・評価的モダリティに関する意味地図と並行的なものが、認知的モダリティについても仮定できるのではないかという提案が含まれている。

1. 中右の階層意味論モデル

中右 (1994) は階層意味論の枠組みを提案している。その全体像は (5) の図に集約される。この図にはいくつかの主張が含まれている。文の意味が階層をなしていること、その階層は $M(S)^2$ から $PROP^1$ までの6層であり、それぞれの層は二分岐して演算子-被演算子の関係を結んでいること、また、それぞれの階層で、演算詞は左側に、被演算詞は右側に現れるということなどである。

(5) 階層意味論モデル



| | | | |
|---------------------------|----------|-----------------|----------------------|
| M(S)= Meaning of Sentence | 文の意味 | TNS= Tense | 時制、テンス |
| D-MOD= Discourse-Modality | 談話モダリティ | ASP= Aspect | 相、アスペクト |
| S-MOD= Sentence-Modality | 文内モダリティ | PRED= Predicate | 述語 |
| PROP= Proposition | 命題 | ARG= Argument | 項 |
| POL= Polarity | 極性、ポラリティ | | (中右 (1994: 15) より引用) |

この図の細部に注意を払う必要はない。ただ、文をモダリティ成分 (MOD) と命題成分 (PROP) に分けている点、そして、モダリティに D モダリティと S モダリティの二層を仮定しているという点に留意されたい。

この枠組みを前提にして、中右はモダリティを (6) のように定義している。

- (6) MODALITY is defined, prototypically, as (i) *a mental attitude* (ii) *on the part of the speaker* (iii) *only accessible at the time of utterance*, where the time of utterance is further characterized as *the instantaneous present* (as opposed particularly to *the durational present* and *the past*). (Nakau 1992 : 5)

この定義によれば、モダリティは三つの要因からなる。中右 (1994) は「ある言語表現がこれらの条件の一つも満足しないなら、モダリティとはなり得ない。そして、三つのうちの一つか二つを満たしているなら、より中心的でない、より典型的でないモダリティの事例となる」と述べている。中右はこのように、モダリティ表現に段階性を認めている。モダリティについて、典型性の概念が提唱されているのである。

中右の定義の特徴は、要約すれば、D モダリティが (7) に示されるように文頭に生じて発話態度を表し、S モダリティと共起する場合にはその左側に生じること、また、(8) と (9) に示されるように疑問文や発話行為節と共起できるという主張を含んでいることである。

- (7) a. *Frankly, I admit* that I have told a lie.

D-Modality S-Modality ≠ I admit frankly that I have told a lie.

- b. *Frankly, I think* that you're making a big mistake.

D-Modality S-Modality ≠ I think it frankly that you're making a big mistake.

- (8) a. *Candidly, who broke* the window?

b. *Intuitively*, do the following pairs mean the same thing?

(9) a. *Briefly*, I promise you to finish my work today.

b. *Precisely*, I order you to get out of here.

(7)-(9) について説明を補足すると、Frankly, Candidly などの文頭の副詞は D モダリティの例であり、パラフレーズに示したとおり直後の表現（下線部）を限定修飾するものではない。(8b) を例にとるなら、この文は If I may ask you to *tell* me intuitively という意味であり、表面に現れていない発話動詞の *tell* が限定修飾を受けているとされる。さらに、D モダリティと S モダリティは独自の特徴をもち、明確に区別されることが論じられている。

ここで、中右の定義のなかでも一見奇妙な条件について注目しておかなければならない。それは条件 (iii) の「瞬時性条件」である。中右は、下記 (10) の文がモーダル化されていないと考える。これらの文の心理動詞が瞬時的現在ではないからである。中右の定義によれば、(10) のイタリック体の表現はモダリティではない。

(10) a. *I always think that* Tom is a spy. (持続的現在の解釈)

b. *Sometimes I think that* the U.S. Postal Service is its own worst enemy.

c. *I have sometimes thought that* I should have emigrated.

d. *I'm supposing*, for the purposes of this argument, that your intentions are unknown.

下記 (11) の例は非常に興味深い。Take it はイディオムを成す心理動詞の一種であるが、副詞の *always* とは共起しない。*Always* が持続時間的な解釈を要求するからである。このイディオム動詞は、瞬時的現在の解釈で用いられなければならない。

(11) {I take it/*I always take it} that you're obliterated when you start singing in Greek.

他方、S モダリティの表現の中には、常に瞬時的現在で用いられる表現がある。この瞬時性条件の重要性は、付加疑問とモダリティについて見るときに明らかとなるであろう。

中右理論を支持する証拠を見る前に、中右理論が基盤をおく「文の二分岐説」に対する批判を見ておきたい。(12) に見られるように、Narrog (2005b) は、文をモダリティと命題に二分する立場では、両者を識別する基準となる言語事実が明示された試しがないと言って批判している。

(12) ...there are no particular linguistic facts that would provide a foundation for identifying a well-defined set of linguistic expressions 'outside the proposition,' while at the same time expressing the speaker's attitude, and then also constituting a grammatical category of its own. (Narrog 2005b : 179)

中右の立場は、この見解に対する異議申し立てと見なすことができる。

ナロックの批判にもかかわらず中右は、二分岐説には統語的証拠が存在すると主張する。その証拠は付加疑問形成から得られる。中右によれば、付加疑問がモダリティ部分を同定し識別する決定的な手がかりを与えてくれる。具体例で見てみよう。

付加疑問形成はふつう、(13) のように最上位節（下線部）について形成される。しかし、もし (14) のようにイタリック体で示した最上位節がモダリティであるならば、そこに付加疑問形成は許

されない。(15) の文は、最上位節（下線部）の主語が三人称であるため、最上位節を当てにされた付加疑問を形成することができる。これは (15) の下線部がモダリティ表現ではないことを意味する。

(13) Mary said that John thinks the war is ending, { didn't she? / *doesn't he? / *isn't it? }

(14) a. *I think* this car needs a tune-up, { *don't I? / doesn't it? }

b. *I don't think* Sue left until noon, { *do I? / did she? }

(15) a. John thinks it's going to rain, { doesn't he? / *isn't it? }

b. He doesn't think Sue left until noon, { does he? /*did she? }

(Nakau 1992)

このように、付加疑問形成によって命題部分があぶり出される。文全体からその命題部分を差し引きすれば、モダリティ部分が得られる。

モダリティと命題の検出テストとして付加疑問形成を用いているのは、中右だけではない。Halliday (2004) も、ある表現がモダリティであるかないかを判別する手がかりとして付加疑問を用いている。たとえば、(16) では、主節の *You know* がモダリティでないために付加疑問化できる。ハリディはこれを根拠に *You know* がモダリティではなく命題であると判定している。他方、文 (17) では、最上位節の *I don't believe* に対して *do I?* のように付加疑問を形成することができない。これは、この部分がモダリティであることを意味する。

(16) You know what's happening tomorrow at five o'clock, don't you?

(17) *I don't believe* that pudding ever will be cooked, { *will it?* /* *do I?* }.

ハリディは (17) のイタリック体のような表現を「確率のメタファー的具現化 (metaphorical realization of probability)」という概念で捉えている。これは、まさにモダリティ表現にほかならない。心的内容節 *I don't believe* は、補文が表す事態が実現する確率が低いことを表す。確率があたかも感覚の数値であるかのように、*I don't believe* という認知節によって表現されている。これをメタファーと見なす理由は、命題が実際には '*I (don't) believe*' や '*I think*' ではなく補文の内容であり、表現と意味にずれがあるためである。

付加疑問の矛先は命題内容である。付加疑問がかからないところは、逆に、モダリティである、という論法である。これらの例から明らかなように、付加疑問テストはモダリティ部分と命題部分を区別する信頼に足るテストである。

付加疑問をモダリティの同定に用いている研究者は、私の調べた限り、中右とハリディのほかにはない。この付加疑問の意味機能は、日本語のモダリティ表現の一つである「念押し・確認」の終助詞「ね」の意味機能と並行的である点に留意しておきたい。

Nakau (1992) は、付加疑問文の研究の伝統において良く考え抜かれた Hooper (1975) の一般化 (18) を、階層意味論の観点から (19) のように改訂している。

(18) Hooper の一般化 (Hooper's generalization) : A tag question may be formed from the main assertion of a sentence if it is a speaker assertion about which the speaker may

express doubt.

- (19) Nakau (1992) の一般化: The tag question is formed on the full propositional domain of PROP⁴ (i.e. the subject and verb of the tag refer back to the subject and verb of the full propositional domain of the host clause).

中右の説明によれば、(20) と (21) の文は下記のような構造を持ち、付加疑問は命題である PROP⁴ のレベルで形成される。イタリック体で示した部分はモダリティ表現である。(20b) の *I STATE* は、表面上は現れない遂行節である。(21b) の *It is possible* は命題の一部を成す。

- (20) a. [_{SM} *I think*] [_{PROP4} Ann is twenty], |isn't she? / **don't I?* |
 b. [_{SM} *I STATE*] [_{PROP4} I always think things are difficult], |don't I? / *aren't they? |
 (21) a. *It seems* [_{PROP4} that this meeting will never end], will it?
 b. [_{PROP4} It is possible we'll be arriving right on time], isn't it?

中右は、このような説明が文の二分岐説のもとでのみ可能であることを強調している。PROP⁴ は完全命題ドメインである。(20a) の *I think* や (21a) の *It seems* は主観的モダリティの典型性条件を満足し、したがって補文の内容に対する話し手の不確信の態度や自信のなさを示す。それらは完全命題ドメイン PROP⁴ の外の生じていると見なされる。

2. 中右の定義の修正

中右のモダリティの定義に戻ると、すぐに気づくことがある。それは、この定義が、制限が強すぎてモダリティ表現のすべてをカバーしないという点である。換言するなら、中右の定義は、定義としての必要条件を満たしていない。たとえば、Declerck and Reed (2005) が指摘している (22) - (24) のイタリック体の表現のような、過去時制をもつ表現が、問題となる事例としてすぐに思い浮かぶ。これらは事実性を保留して談話上の暫定性を示すモダリティ表現である。中右の定義は、これらの事例を捉えることができないように見える。(これらの事例について詳しくは Nakau (1992) を参照されたい。)

- (22) a. *I thought* you weren't married.
 b. *I thought* you might lend me your camera.
 (23) a. *I wouldn't think* it's been played in a cinema for years.
 b. Well *I should imagine* they're playing baseball. (Bogaert 2010)
 (24) A: Do you think Sally is pregnant?
 B: *I couldn't say* she is / *I would say* she isn't.

他方では、中右の定義は制限が弱すぎるため、モダリティ表現の外延を狭める必要がある。以下ではこの制限の問題を考察していく。中右の定義をどのような方針で修正すればよいかを決めるために、Nuyts (2001) に基づいてモダリティ表現全般を一瞥してみよう。

ノイツは、(25) に例示されるような、少なくとも 4 種類の認知的モダリティ表現があると述べて

いる。法副詞、法形容詞、心理状態述語、そして法助動詞である。

- (25) a. Maybe/probably/certainly/...they have run out of fuel.
 b. It is possible/probable/likely/certain/...that they have run out of fuel.
 c. I think/believe/...they have run out of fuel.
 d. They may/might/must/...have run out of fuel.

しかし、これらのうち三つは「閉じられた」範疇である。法副詞、法形容詞、法助動詞は個数が限られている。確かにモダリティ表現は非常に多様であるが、ナロックが批判するほどに無限定ではない可能性がある。以下、ナロックの批判について検討してみよう。

Halliday (2004) の列挙している統語的に動詞ではない形式、たとえば possible, certain などの法形容詞は、五つの異なったパターンに生じる。ただし、一つの形容詞が五つのパターンすべてに生じるということではない。これらの法形容詞と法副詞は閉じられた類であり、取り得る値は非常に限られている。ハリデイは、probable, possible, certain などの法形容詞の表現は十分に限定されていると述べている。実際、言及されている確率の値は、たかだか五つか六つであり、列挙可能である。動詞でない形式はこのように十分に制限されている。したがってモダリティの多様性を制限するという問題は、動詞を用いる表現形式をどのように制限できるかという問題にほかならない。

Nuyts (2001 : 29) が述べているように、認知的モダリティは、語彙だけでなく、多くの異なった言語形式タイプ・文法形式によって表現される。また、一つの意味的範疇に代替的な表現が存在する場合、その存在には理由がなければならない。(25) の表現の選択は、これらの形式がどのように機能を異にするかに決定的に依存する。

初期の論文でハリデイは、モダリティとの関連で心理動詞表現に言及することはなかった(Halliday 1970を参照されたい)。しかし、Halliday (2004) では、(26) に見られるように、心理動詞のモダリティ用法に言及している。ハリデイは、I believe と同義的な他形式の表現を例示している。そこで、開いたクラスである動詞の範囲を何らかの形で制限できないか考えてみよう。動詞のクラスを制限するにはどのようにすればよいだろうか。

ハリデイは、(26) に見られるように、話し手の確信の度合いを表現する際限ない形式に言及している。なお、原文の例文(ボールド体)は冒頭のみ引用し、後続部分は省略する。

- (26) It is not always possible to say exactly what is and what is not a metaphorical representation of a modality. But speakers have indefinitely many ways of expressing their opinions—or rather, perhaps, of dissimulating the fact that they are expressing their opinions; and cites the following expressions as the concrete cases: **It is obvious that...**, **It stands to reason that...**, **Nobody tries to deny that...**, **it is particularly difficult to avoid the conclusion that...**, **There can be no doubt... that...**, **the impartial spectator will surely agree that...**, **Any teacher will agree that...**, **Most people would agree that...**, **everyone knows that...** and a thousand and one others, all of which mean 'I believe'. (Halliday 2004 : 616ff.) (例文の強調は原文のまま、縮約は筆者)

この説明の揺らぎは、これらがボーダーラインに位置する証左であると言えよう。

(29) *It is surprising that he ate wild mushrooms, {isn't it? / *didn't he?}* (Nakau 1980 : 178)

叙実性 (factivity) と事実性 (factuality) は厳密には同じ概念ではないが、ここでは両者が異なることがないと仮定したうえで、中右のモダリティを事実性の観点から調べてみよう。中右は、五つのタイプの S モダリティ表現を列挙している。その中で、価値判断のモダリティと名付けられた (d) タイプに焦点を当てたい。なぜなら、ほかのタイプの表現がすべて非叙実的述語であるのに、このグループは叙実的述語からなり、異質だからである。

タイプ (d) は下記 (30) に例示される。これだけが S モダリティの中で叙実的なので、中右の体系の中で浮いている印象を与える。中右 (1994 : 57) はこのクラスを S モダリティとして分類するが、同書 69 ページ以下ではこれを D モダリティとしている。ここに分類の揺らぎが見られるのはなぜかといえば、補文の事実性に注意を払っていないからである。補文の事実性がナロックのモダリティ定義の中で決定的な要素であったことを想起されたい。

タイプ (d) の動詞に共通する特徴は、叙実的述語を構成するということである。(d) 以外のタイプとは言えば、それらはすべて非叙実的である。この点を確認しておこう。

(30) a. I regret/am sorry, I resent/repent/like/hate it (that), I am surprised/annoyed/disappointed, I find it odd/surprising (that)

b. to my surprise, to my regret, curiously enough, interestingly, unfortunately

c. foolishly, wisely, stupidly, cleverly

(31) a. *I am afraid* I disagree with you.

b. *I regret* that you are fired.

c. *I'm sorry*, he's busy at the moment.

d. *I'm sorry* but there's no one called *Nikki*...

(32) a. I disagree with you, *I am afraid* (to say).

b. You are fired, *I regret to inform you*.

c. *I'm sorry to say* that he's busy at the moment.

d. *I'm sorry to tell you this*, but there's no one called *Nikki*...

(中右 1994 : 69)

中右 (1994 : 70) は、これらが話者の発話態度を表す D モダリティであると付言している。(32a) や (32b) に見られるように下線部の補文が S 上昇を許し、(32c) や (32d) に示されるように、発話動詞 to say や to tell you this などによって増設されうるからである。(28)-(32) の説明には、中右の判断の揺れが見て取れる。詳しくは中右 (1994) を参照されたい。

叙実性と言え、Narrog (2005a, 2012) はこれがモダリティの定義的な特徴であると主張している。私の提案は、この叙実性の観点を中右の定義に取り入れて、タイプ (d) の動詞クラスを制限するというものである。

ナロックは、次の例を引いてこの点を説明している。

- (33) a. The cats are happy now.
 b. The cats must be happy now.

(33a) はモダリティのマーカ―を含まないの、事実を述べる文である。(33b) は、状況が純粹に思考の領域にあるものとして描かれており、その事実性に関しては不確定であり、その状況が現実として存在するかどうかに関しては未決とされる。

ナロックはモダリティは事実性によって定義するのがよく、Palmer (2001) のようにこれを「主張 (assertion)」によって定義すると、モダリティが発話行為レベルに狭く限定されてしまい問題であるとする。彼の定義を (34) に引用しておこう。

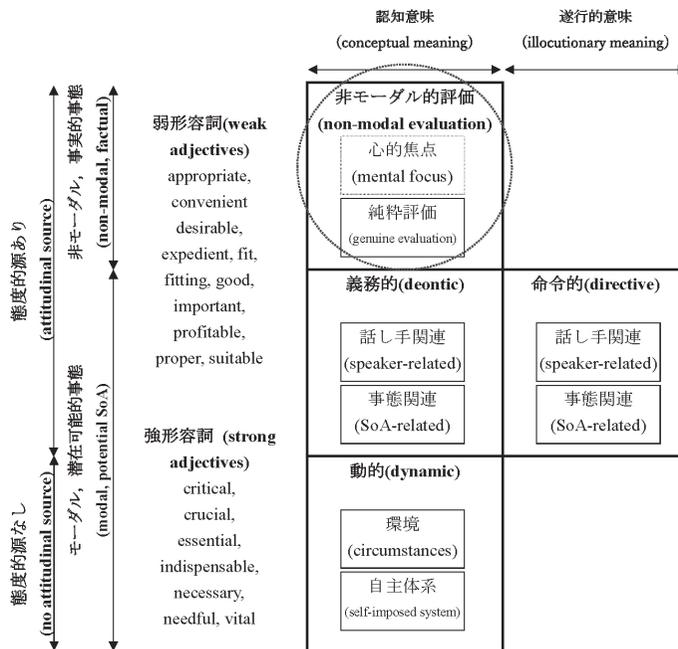
(34) ...modality is a category that refers to non-factual (i.e. non-realized or non-actualized) states-of affairs. (Narrog 2012b : 6)

ナロックは、モダリティの定義には、話者の態度によるものと「事実性」に基づくものという二つの大きなアプローチがあり、このうち後者がより適切であり、将来の研究にとって実りが多いと結論している。

3. Van linden and Verstraete (2011) の認知地図

ここで Van linden and Verstraete (2011) の法形容詞の分析に関する提案を見ておくことが役に立つであろう。(35) は同論文の図 3 (p.161) の関連する部分を再現した図である。

(35) Van linden and Verstraete (2011) による法形容詞の認知地図



(Van linden and Verstraete (2011 : 161) の図 3 より関連部分を引用。円は筆者の加筆。)

Van linden and Verstraete (2011) は、図中左下にある *critical, crucial* などのモーダルな強い評価形容詞と図左上にある *appropriate, convenient* などのモーダルでない弱い形容詞を区別する上で、事実性が決定的な要因であると考え。そして、弱い形容詞の一部を、前提された事態に関する価値の意味領域(上部)に追いやり、モーダルの領域から外すことを提案して(35)のような認知地図を描き、その中に非モーダルな「純粋評価 (*genuine evaluation*)」の領域を含めている。この認知地図は、モーダル・評価的領域に四つのタイプの多義性があるという主張を含む。すなわち、非モーダルな評価 (*non-modal evaluation*)、義務的 (*deontic*)、指令的 (*directive*)、動的 (*dynamic*) である。

私の提案は、これと平行的な領域内の区別が認識的モダリティに関しても必要であるというものである。この点を考えるために、Halliday (1970) がモダリティに類する表現についてどのように述べているか見ておくことにしよう。ハリデイは、モダリティに似た話者のコメントを表す表現類があることを認めている。モダリティの隣接領域に類似の表現があるとして挙げているのが(36)の例である。

(36) *frankly; generally; wisely; fortunately; officially; reasonably; personally; incidentally; doubtfully.*

これらは、いわゆる話者のコメント (*speaker's comment*) を表す語句であり、ほとんどが中右の枠組みではDモダリティ表現である。注1

冒頭で述べたように、ハリデイにとっては、モダリティは文モダリティ、すなわち認識的モダリティである。ところが、中右理論では二つのモダリティが認められている。Sモダリティはハリデイのモダリティに相当し命題をスコープとする。もう一つのモダリティはDモダリティであり、ハリデイの見解ではこれはモダリティではなく「話者のコメント (*speaker's comment*)」である。(36)は中右の枠組みではDモダリティと考えられている点に注意されたい。

広義の「話者のコメント」より包括的なカテゴリーの中にモダリティ表現は位置づけられる。中右の枠組みで考えてきたわれわれのことばで言うなら、(36)に挙げられている例は、Dモダリティ表現である。図解すると、全体像は(37)のようになる。

(37)

Halliday's (1970) speaker comment

| | | | |
|---------------|--|---|--------------------------|
| performative | D-modality <i>frankly; generally, even; I ask you (that), please; first of all, etc.; fortunately; officially; reasonably; personally; incidentally;</i> | | complement (±factual) |
| | <i>doubtfully, wisely</i> | | |
| modal | S-modality (expression of probability) adverbial of truth judgment (<i>probably, certainly, possibly, etc.</i>) (modal adjective) <i>I am sure/certain,</i> | | -factual -factual |
| | <p style="text-align: center;">METAPHORICAL</p> mental verb clauses (<i>I think/believe/suppose/assume</i>), etc emotive modality? <i>it is surprising that ...</i> <i>I am surprised that should</i> <i>will</i> (epistemic) <i>I fear that ... may/might</i> <i>I'm afraid ... may/might</i> | | |
| propositional | non-modal probability evaluation <i>it is {certain/plausible/possible} that</i> | speaker's comment evaluative, attitudinal emotional expression <i>It's surprising that ... (no modal)</i> | -factual |
| | <i>there is a possibility that ...</i> | emotional proposition <i>I'm surprised that ... (no modal)</i> | +factual |

Van linden and Verstraete (2011) が非モーダルな話者のコメントを彼らの枠組み内に位置づけているのとちょうど同じように、私は、感情表現と感情的モダリティ（の候補）をこの図の中に位置づけたい。問題の領域は、(37) の図中、だ円で囲んだ二つの領域である。

隣接する表現は境界が重なることがあるとハリディは言う。ハリディは、特にモダリティとモジュレーションとについて注意を喚起し、次のように述べている。

(38) ...there is also some actual overlap between the two systems [i.e. the modulation and modality (筆者加筆)], and this accounts for the blending that can occur. ...Modulation, especially of the passive type, is a condition imposed by someone; and if that someone is the speaker himself then it becomes a kind of modality. (Halliday 1970 : 347ff.)

ここでモダリティと叙実性の関係について一言述べておく必要があろう。Field (1997) は、叙実性とモダリティ（話者のスタンス）との間に重要な相関関係があることを指摘している。彼女は、前提は一種の認識的スタンスの表現として考えられるが、その値は確実性等と等価であると見なしてよい、という主旨の主張をしている。

(39) When affective predicates are followed by *that*-complements,...., the result always appears to be a factive construction, i.e one which indexes certainty of the truth of the complement. (Field 1997 : 807)

この引用からも明らかなように、前提された補文は、話者の確信（certainty）を表すと見なすことができる。

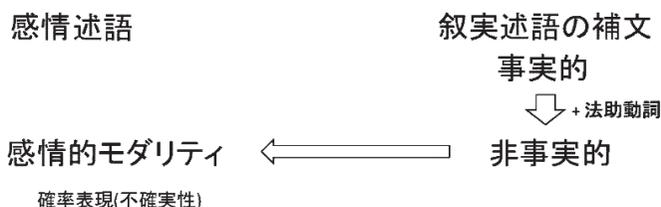
フィールドはさらに進んで、二つの叙実的述語があるとする。認識的叙実述語と感情的叙実述語である。フィールドは、叙実的述語が「叙実性を失う」環境があると述べている。彼女自身は、この事実から別の議論を展開しているのであるが、重要なのは、叙実性が失われる現象の存在を認め

ている点である。具体的には、疑問文、条件節、より一般的には、話者が補文の真実性について確信が持てない場合には常に、「叙実性を失う」のである (Field 1997: 802)。

ここで想起すべきは、Van linden and Verstraete (2011: 154) が、good, appropriate, important など、意味が義務的なものから態度的なものにまで亘る多義的な形容詞の存在を論じているということである。したがって、たとえば、彼らは補文の叙実性が主文述語の解釈に影響を与えると述べている。感情述語の補文においても同様に、主節の解釈について補文からの影響が生じていると考えられないだろうか。

感情表現は、通例、モダリティではない。感情述語の補文は叙実的であり、したがって前提されている (= 事実的である) からである。しかし、ある条件の下では感情述語の補文が「事実性を失い」、話者の確信の度合いを下げる。その結果、述部が「確率の数値表現」として解釈されることになる。この間の事情を図解すれば、(40) のようになる。

(40)



事実的な補文が法助動詞を含むと非事実的な内容となるため、その補文の影響を受けて、感情述語を含む主節は感情的モダリティとして解釈されることになるというわけである。この主節の表す意味は、Van linden and Verstraete (2011) が非モーダルな評価と呼んでいる領域に相当する。

ここでは感情述語に焦点を絞り、その中にモダリティ表現と考えられるものが存在するかどうかを判断したい。忘れてはならないことは、通例、認識的モダリティ、もっと一般的には主観的な表現は、叙実的補文の中ではかなり制限されるということである。

叙実的述語の補文は前提されている。それらは非モーダルである。(41) の文を見てみよう。これらの文は通常の感情述語を含み、その補文には法助動詞が含まれずに前提とされている。われわれの修正した定義では、表現全体が非モダリティ的な話者のコメントである。したがって、(41) - (43) のイタリック部はモダリティとは考えない。

- (41) a. *I was surprised* that I fell.
 b. *We were surprised* that we agreed with him. (Bolinger 1984)
 c. *I was crushed (overcome)* that I had lost.
 d. *I was outraged* that I had been mistreated.
 e. *I was ecstatic* that I had won.
- (42) a. *I am happy* that you are well.
 b. *I am glad* that the hon. Gentleman has read the report.

c. *She was **angry** they had wasted the precious minutes on stupid small talk.*

(Mindt 2006)

(43) *It is therefore **surprising** that none of the articles includes any mention of the costs that might be incurred.*

(Mindt 2006)

4. 感情的モダリティの候補と位置づけ

「理論的、暫定的な補文中の should」(澤田 2006) を含む (44) のような文の主節は、感情的モダリティの候補である。しかし、補文が法助動詞を含んでいる場合、その節は前提とされているのだろうか。澤田 (2006) はこの種の should を「感情的モダリティ」の名の下で論じている。私は、これが譲歩の may、たとえば *He may be a good teacher, but he is rude.* という文における may と同様のものであると考え。周知の通り、譲歩の may は事実的である。(45) はその例である。

(44) a. *It's **a shame** that we *should* not have thought of this before.*

b. *I **regret** that she *should* disregard my orders.*

c. *I'm **amused [astonished, ashamed, concerned, pleased]** that it *should* be Fred who wins the quiz game.*

d. *It is **unusual** that we *should* not have received a letter from him yet.*

(45) a. *He *may* be a good doctor, but he is a bit socially awkward.*

b. *He *may* have lived in London for five years, but he does not speak English very well.*

Declerck (1991 : 422) も「理論的、暫定的な should (theoretical, putative 'should')」について論じている。ここでも、補文が本当に前提されているかどうかを問わなければならない。確かに、should を使い直説法を使わないことの効果は、理論的、暫定的な意味を表し、事実を表していないと解釈される点にある。しかし、デクラークによれば、暫定の should は事実的である。デクラークは、(46d) の should は事実コミットしていると主張する。その解釈では補文が事実を表しているというのである。そこで、理論的、暫定的 should の事実性からそれを含む補文は感情的モダリティではないと考えておきたい。しかし、補文が should not have thought のように否定辞を含む場合は、主節は感情的モダリティであると考え。

もっとも、(46c) (46d) では、failed the exam ということは、どちらの文でも含意される。

(46) a. *It's **ridiculous** that John refuses to help his son.*

(= 事実的 : It is a fact that John refuses to help his son, and that is ridiculous.)

b. *It's **ridiculous** that John **should** refuse to help his son.*

(= 暫定的 : The very idea that John should refuse to help his son is ridiculous; it is ridiculous to suppose such a thing.)

c. *I'm **surprised** that she has failed the exam.*

d. *I'm **surprised** that she **should** have failed the exam.*

叙実的補文には、本来、モダリティが生じないはずである。たとえば、叙実的補文内には *frankly* や *surprisingly* など認識的モダリティの副詞は生じない。

動詞 *surprise* を基にした *surprising* などの表現も、補文に法助動詞が含まれている場合、感情的モダリティの候補として考えられる。

(47) If the geologists are divided, *it is not surprising* that the politicians *will* also be divided.
(Mindt 2008 : 1507)

(48) Scum Manifesto by Valerie Solanas a feminist separatist tract by the woman who shot Andy Warhol in 1967. It's extreme, but *I'm not surprised* some women *would* feel like that. As a man, I feel very female myself in lots of ways (BNC)

(49) And he goes no, he goes oh *I'm surprised* I thought Johnny *would* have told you all of it. (BNC)

(50) Don't you think *it's surprising* that she *couldn't* recall delivering twins for Lilian, when it happened at the same time as Donjna, almost? (BNC)

(51) As a result *it is perhaps not surprising* that new advocacy schemes *can* be viewed with suspicion or seen as troublemaking. (BNC)

(52) Having been to Cuba and knowing how repressive it is, *I was a little surprised* that he *might* not want to stay (in America) (Hacquard & Wellwood 2012 : 412)

感情的モダリティの候補の三つめとして、懸念 (apprehension) と恐れ (fear) が挙げられる。暫定的 *should* と一見重複するようであるが、これらの例の助動詞はそうではない。BNC でデータを検索してみたところ、*should* 以外の法助動詞を含む補文を伴う *surprise* の例として、(48)-(51) が見つかった。これらは実際、非常にまれである。法助動詞 *may* を伴う例は見つけることができなかった。叙実的動詞は普通、補文中に主観的な表現を含むことを許さないが、これらの助動詞は主観的なものである。感情的性向には、感情、気分、態度が含まれる。認識的資質は、参加者の信念・知識に言及する。

(53) a. *I'm afraid* he *hasn't* done anything about it yet. (Declerck 1991)

b. *We were afraid* that the curfew *might* be lifted

c. *I'm worried* that she *may* not have received my letter.

d. *We were worried* that we *would* run out of petrol before we reached a petrol station.

(54) a. If we were to add those provisions to the Bill, *I fear* that we *might* not fall within the long title of the Bill. (BNC)

b. If you are, feel able to go one step further, and make specific guidance as to sectors in the way we've described, by reference to physical features, that would be fine. But *I fear* that you *may* not be able to do that. (BNC)

c. *They fear* that the help *will* come too late.

(55) a. They were a source of the highest gratification to us all, but neither Letter was so full or explanatory as we could wish and from the slight mention of Mrs. Gould *we are fearful* that her health **is** not much improved. (BNC)

b. *We are fearful* that older people who want to remain at home **may** not have the choice because the cost may be more than local authorities can afford', says divisional director Evelyn MeEwen. (BNC)

不安や恐れを表す表現が、モダリティ的に振る舞う候補として考えられる。もちろん、これらすべての表現が感情的モダリティであるというのではない。修正された中右の条件を満たすもののみが感情的モダリティとしての資格があると考えられる。

(56) *I'm afraid* he hasn't done anything about it yet. (Declerck 1991)

不安は補文内容の事実性に自信が持てないことと調和 (concord) する。感情の種類によって、補文の内容に対する確信度が変わってくると考えられる。不安の対象は、多くの場合、ある場面が実現されてしまうのではないかとということなので、このような that 節では may や might がよく用いられる。澤田 (2006) を参考に作例した次のような例も候補となる。

(57) 彼女がぼくの手紙を受け取っていないのではないかと不安だ。

不安を表す表現には、モダリティ的な表現が含まれていると言うことができる。

5. 結語

結論を得るためには、付加疑問文のデータが必要である。感情的モダリティ (補文内にもモダリティ表現や否定辞が含まれるケース) が、調査すべき候補として考えられる。

(58) a. *I'm also afraid* that you *might* have to face up to the fact that Silas hasn't got private talks in mind.

b. *I fear* it *may* have gone the same way as Honest John's other great idea,... (BNC)

c. *I'm not surprised* some women *would* feel like that.

(= I expect (there is a possibility that) some women *would* feel like that.)

(59) は感情的命題である。補文内にモダリティが含まれないからである。

(59) a. *It is surprising* that he ate wild mushrooms, isn't it? (Nakau 1980 : 178)

b. *She was very surprised* that she'd even gone over there. (Field 1997)

今後の研究では、感情的モダリティの候補が付加疑問テストに関してどのような振る舞いをするかを調べ、得られたテスト結果についてその理由を明らかにしなければならない。また、感情の種類と確率の解釈の可能性との相互関係を調査することも必要である。

感情表現に関する認知地図を、代表的な表現を図中に配した (60) (= (37)) として提案したい。

(60) 感情表現に関する認知地図

Halliday (1970)の話し手のコメント

非モーダルからモーダルへの連続性

| | | |
|------|---|------------------|
| 遂行的 | Dモーダリティ <i>frankly; generally, even; I ask you (that), please; first of all, etc.; fortunately; officially; reasonably; personally; incidentally;</i> | 補文 (±事実的) |
| モーダル | Sモーダリティ (確率の表現) adverbial of truth judgment <i>(probably, certainly, possibly, etc.)</i> (法形容詞) <i>I am sure/certain,</i> 心理動詞節(<i>I think/believe/suppose/assume</i>), etc メタフォリカルな表現 感情的モーダリティ? <i>I am surprised that should</i> <i>I fear that ... may/might</i> <i>I'm afraid ... may/might</i> | -事実的 -事実的 |
| 命題的 | 非モーダルな確率評価 <i>it is {certain/plausible/possible} that</i> 話し手のコメント 評価的・態度的な感情表現 <i>it is surprising that ...</i> <i>can (dynamic)</i> <i>It's surprising that ... (モーダルなし)</i> emotional proposition <i>I'm surprised that ... (モーダルなし)</i> <i>They were surprised that</i> | -事実的 +事実的 |

これは話し手のコメントとモーダリティのための認知地図の素描である。この素描を精緻化していくことが残された課題である。とりわけ、感情的モーダリティと話者のコメントとの境界内の連続性がどのようにになっているかを詳らかにするように努めたい。

修正された中右の条件は、(60)の図中央の太線で囲まれた長方形の内側に焦点を当てている。この領域は認識的モーダリティを含む。同時に、話者の評価の表現がここに含まれることを指摘した。これはちょうど、Van linden and Verstraete (2011)が義務的な領域について示したのと並行的である。この種の領域が広義の話者のコメントである。考察の基礎となりうる定義が提示できたのではないかと思う。検証・修正は今後の研究に委ねたい。

本稿で示した三つの点をまとめておこう。まず、付加疑問形成によって中右の意味論モデルが説明力を持っているということを示した。モーダリティと付加疑問形成には強い相関関係があることを意味する。二つ目は、中右のモーダリティの定義は、特に補文の事実性を考慮に入れるように修正が必要であることを示した。最後に、命題的感情表現の中には感情的モーダリティ表現の候補であるケースが、少なくとも三つあるということ述べた。感情的モーダリティの場合には、叙実的補文の中に認識用法の助動詞や否定辞など、補文の叙実性をキャンセルする表現が含まれるという点が重要である。

注

※本稿は、大東文化大学海外研究員としてベルギー王国ルーヴェン・カトリック大学 (KU Leuven) にて研究を行い、2016年3月4日に同大学にて発表した講義原稿を基にしている。講義内容に関して、Kristin Davidse教授、Jean-Christophe Verstraete教授、Stef Spronck教授から助言を頂いた。記して謝意を表したい。残されている不備は、すべて筆者の責任である。

I 先に触れるところのあった、中右 (1994) の分類における S モダリティ 第四類 (価値判断のモダリティ) の揺らぎに関する詳しい考察については、別の機会に譲りたい。

参考文献

- Bolinger, D. L. (1953) Verbs of emotion. *Hispania* 36 (4), 459-461.
- Bogaert, J. (2010) A constructional taxonomy of I think and related expressions: Accounting for the variability of complement-taking mental predicates. *English Language & Linguistics* 14 (3), 399-427.
- De Haan, F. (1999) Evidentiality and epistemic modality: Setting boundaries. *Southwest Journal of Linguistics* 18 (1), 1-34.
- Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha, Tokyo.
- Declerck, R. and S. Reed. (2005) What is modal about *I thought that*...? *English Language & Linguistics* 9 (2), 311-332.
- Delancey, S. (1997) Mirativity: The grammatical marking of unexpected information. *Linguistic Typology* 1 (1), 33-52, ISSN (Online) 1613-415X.
- Field, M. (1997) The role of factive predicates in the indexicalization of stance: A discourse perspective. *Journal of Pragmatics* 27, 799-814.
- Hacquard, V., and Wellwood, A. C. (2012) Embedding epistemic modals in English: A corpus-based study. *Semantics and Pragmatics* 5 (4), 1-29. DOI: <http://dx.doi.org/10.3765/sp.5.4>
- Halliday, M.A.K. (1970) Functional diversity in language as seen from a consideration of modality and mood in English. *Foundations of Language* 6 (3), 322-361.
- Halliday, M.A.K. (2004) *An Introduction to Functional Grammar*. Oxford University Press, New York.
- Hengeveld, K. (1987) Clause structure and modality in Functional Grammar. In J. Van der Auwera and L. Goossens. eds. *Ins and Outs of the Predication*, 53-66, Foris Publications, Dordrecht.
- Hengeveld, K. (1988) Illocution, mood and modality in a functional grammar of Spanish. *Journal of Semantics* 6, 227-269.
- Hooper, J.B. (1975) On assertive predicate. In J.P. Kimball ed. *Syntax and Semantics* 4, 91-124, Academic Press, New York.
- Karttunen, L. (1971) Some observations on factivity. *Papers in Linguistics* 4 (1), 55-69.
- Mindt, I. (2006) Distributional data and grammatical structures: The case of so-called 'subject extraposition'. *ZAA*, 2 (54), 149-162.
- Mindt, I. (2008) Appropriateness in discourse: The adjectives *surprised* and *surprising* in monologue and dialogue. *Journal of Pragmatics* 40 (9), 1503-1520.

- 中右実(1980)「文副詞の比較」國廣哲彌(編)『日英語比較講座第2巻 文法』, 157-219, 大修館書店, 東京.
- Nakau, M. (1992) Modality and subjective semantics. *Tsukuba English Studies* 11 (6), 1-45.
- 中右実(1994)『認知意味論の原理』大修館書店, 東京.
- Narrog, H. (2005a) Modality, mood, and change of modal meanings: A new perspective. *Cognitive Linguistics* 16 (4), 677-731.
- Narrog, H. (2005b) On defining modality again. *Language Sciences*, 27 (2), 165-192.
- Narrog, H. (2009) *Modality in Japanese: the layered structure of the clause and hierarchies of functional categories*. John Benjamins, Amsterdam.
- Narrog, H. (2012a) Beyond intersubjectification: Textual uses of modality and mood in subordinate clauses as part of speech-act orientation. *English Text Construction* 5 (1), 29-52.
- Narrog, H. (2012b) *Modality, Subjectivity, and Semantic Change*. Oxford University Press, Oxford.
- ナロック・ハイコ(2014)「モダリティの定義をめぐって」澤田治美(編)『ひつじ意味論講座3 モダリティ I : 理論と方法』, 1-23, ひつじ書房, 東京.
- Nuyts, J. (2001) *Epistemic Modality, Language, and Conceptualization: A Cognitive-pragmatic Perspective (Human Cognitive Processing)* John Benjamins, Amsterdam.
- Palacios Martínez, I. M. (2009) Quite frankly, I'm not quite sure that it is quite the right colour. A corpus-based study of the syntax and semantics of *quite* in Present-Day English. *English Studies* 90 (2), 180-213.
- Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality*. Cambridge University Press. Retrieved from
- Portner, P. (2009) *Modality*. Oxford University Press, Oxford.
- Postal, P. M. (1972) A few factive facts, *Linguistic Inquiry* 3 (3), 396-400.
- 澤田治美(2006)『モダリティ』開拓社, 東京.
- Van der Auwera, J. and V. A. Plungian. (1998) Modality's semantic map. *Linguistic Typology* 2 (1), 79-124.
- Van linden, A. and K. Davidse. (2009) The clausal complementation of deontic-evaluative adjectives in extraposition constructions: A synchronic-diachronic approach. *Folia Linguistica*, 43 (1), 171-211.
- Van linden, A. and J.C. Verstraete. (2011) Revisiting deontic modality and related categories: A conceptual map based on the study of English modal adjectives. *Journal of Pragmatics* 43, 150-163.
- Wolf, L. (2012). Epistemic modality and the subjective-objective distinction. *Proceedings of ConSOLE XIX*, 331-342.

(2018年9月27日受理)